

致するものほとんど一致が見られないものがある。また『パンニャーサジャータカ』の特徴として、物語を構成する会話がそのまま偈になっているケースが目立つ。この点は、散文箇所が偈に対する注釈の働きをしている聖典ジャータカとは異なっている。その傾向は *Zimme Pannāsa* で顕著である。そして、タイとビルマに伝わる『パンニャーサジャータカ』は、体系的な関係が薄いことから、各々別個に編纂されたものと考えられている。

タイ方面に伝わる『パンニャーサジャータカ』は未出版でもあり、早急に全貌が明らかになることが望まれる。

大乘仏教の起原について

村上 真 完

問題の所在 平川(1963) (大乘仏教仏塔中心在家教団起原) 説は、村上(1971)・G. Schopen(1979, 2000)・佐々木閑(2000)が批判する。仏塔を中心とする在家(部派に所属しない「非僧非俗」)の菩薩教団が大乘経典を構想したのか? 大乘経典の漢訳は二世紀後半(支婁迦讖)に始まり、ガンダーラやマトゥラーの大乘の仏像(Avalokiteśvara, Amitābha)も同様であるが、碑銘は六世紀初(塚本 Gunāghar I)まで大乘教徒の存在を語らない。なぜか?

検討と吟味 仏塔(stūpa)は主に在家信者が建造し維持し

たにしても、そこは住居ではない。住居は塔から隔てられた *vihāra* (精舎、僧坊)であって、出家教団(*saṅgha*)が取り仕切る。後漢・南北朝に西域等(安息・月氏・康居・罽賓)から来た訳者の多くは沙門と呼ばれ、在家(優婆塞)は少ない。郁伽長者経、十住毘婆沙論等では塔寺は塔と僧坊を含む。菩薩の出家作法(弥勒による)は願望に基づく。法頭は大乘を学ぶ僧(于闐・子合国)、大小乗を学ぶ僧(羅夷・毘荼・僧迦施)、摩訶衍僧伽藍(*Paṭaliputra*)に言及し、大乘の寺では大衆部の律を得たという。玄奘は大乘(西域四国、インド十七国)、大小二乗兼学(西域一國、インド十四国)の寺に言及。南海寄帰伝は、若し菩薩を礼し大乘経を読むものは、これを名づけて大となし、この事を行ぜざるは小となす、という。bodhisattva-gaṇa (菩薩衆)は在家と出家とを含むが、出家が優位に立ち、比丘僧団とも云われた。グプタ期の碑銘の *Sākya-bhikṣu* (釈種比丘)は一切衆生の無上智を願う(「大乘を奉ずる」)。Avalokiteśvara (観音)像は出家者も奉獻している(塚本 Kūdā 9)。スコエン蒐集写本は大小乗に亘る。大乘経典における声聞批判は、出家の否定ではない。佐々木が指摘するように出家菩薩が部派の比丘であった可能性が大きい。大乘最大の論書『瑜伽師地論』は声聞地に始まる。大乘経典は在家者に配慮はするが、出家を志向している。大乘仏教は理想を説くが、悪比丘等の迫害を蒙ったと言うのは、当時の実情の反映であろう。森(aranya)や辺地に住むというのもそのためであろう。大乘経典に経を説く人といわれる *dharma-bhāṇaka* (説法師)は出家が主体である(比丘に限る例がある。村上1971)。説法

第4部会

師は大乗經典の作者か？ 説法よりも前に經典の創作

(*sūtrāntābhinihāra*, *dharmadeśanābhinihāra*) があつたはず(村上1998, 2000)。その大乗經典の多くは想像力の産物のようである。その想像と確信のためには、極度の精神集中(三昧)によって、仏に会い仏の声を聞くような体験をも必要としたであろう。そのような極度の精神集中(三昧)には、出家者が在家者よりも、より有利な立場にあつたと考えられる。

結論 大乗仏教は、在家者を含む一般の人々が等しく仏道に入ることを理想とながら出家を勧める。大乗經典を創作したのも出家者達が主であつて、部派仏教教団の伝統を批判しながらも、その中にいたのではないのか。そういう視点のもとに今後の課題は、それぞれの「大乗經典が、どの部派とどういう関係があるのか、詳しく検討することであろう」。

参考文献 村上真完：「大乘における在家と出家の問題―大乗仏教成立史論に関連して」(『仏教史学』一五―一) 1971; 「大乗經典の創作 (*sūtrāntābhinihāra*, 能演諸經、善説諸經)」(印度学宗教学会『論集』二五) 1998; 「大乗經典の想像と創作 (*abhinihāra* 考)」(『印度哲学仏教学』第一五号) 2000. 平川彰：『初期大乗仏教の研究』1963; 『平川彰著作集』第三―五巻、1989-90. 塚本啓祥：『インド仏教碑銘の研究 I・II』1996, 98. Gregory Schopen: "Mahāyāna in Indian Inscriptions," *IJ.* 21, 1979. グレゴリー・シヨペン著、小谷信千代訳：『大乗仏教興起時代 インドの僧院生活』2000. 佐々木閑：『インド仏教変移論 なぜ仏教は多様化したのか』2000.

碑銘から見た義天の思想について

鄭 世 成

韓国の天台宗を開いた大覺國師義天を研究する上での文献資料は、大変限られている。本稿では、その中の一つとして義天の碑銘について検討したい。現在残存している碑銘としては、五冠山大華嚴靈通寺の「贈諡大覺國師碑銘」と、南崇山僊鳳寺の「天台始祖大覺國師碑銘」がある。それによると義天は一〇五五年九月二八日、高麗国の王家に生まれた。諱は煦、俗姓は王氏、字は義天という。高麗国を開いた太祖大王の四代後孫であり、文宗王の四番目の子息とされる。十一歳の頃に景德國師に就いて剃髪し、靈通寺に住した。また、佛日寺戒壇で受戒を得た。さらに三蔵を理解し体得するために昼夜を分たず学問に精進したという。その中で賢首の教觀及び頓教・漸教の説示、あるいは大・小乗の經、律、論、章、疏まで幅広く探索したとされる。特に仏教以外の学問にも見聞を開き、孔子・老子の書籍から子史集録や諸子百家の学説まで勉強し、その論議は無窮無尽になったと讃えられる。一〇六七年には祐世僧統の教書が下された。また、義天は幼年期から宋に留学して仏道を求めることを希望した。淨源法師を欽慕して書札を送り、法師より招請の書信が来たという。一〇八四年、宋に渡港することを決意し、国王に進言したが、群臣たちの反対が強硬であることをから挫折した。翌年、義天は国王と太后に遺状を残し、深夜商船に